

自訟^{じしやう}（杉浦重剛^{すきうらしげたけ}）

登嶽小天下 自誇意氣豪

其奈山上 仰之一層高

岳^{がく}に 登^{のぼ}つて 天下^{てんか}を 小^{しょう}とす

解説 英国留学を終えて帰国したときの作。

自^{みずか}ら 誇^{ほこ}る 意^{いき}氣^きの 豪^{ごう}なるを

語釈 ※嶽Ⅱ大きな山。※小天下Ⅲ孟子に「孔子東山に登つて魯を小とし、太山に登つて天下を小とす」とある。高い泰山に登つてみれば、天下さえも小さいと感じた。※自Ⅱ「みずから」と読んで自分からの意とする。※意氣Ⅲ意氣ごみ。※豪Ⅱ盛んな様子。※山上Ⅱ東山に対する太山の存在のような山。※奈Ⅱいかん、どうする。※一層Ⅱもう一つの層（建て物の階）の意味である。

其^それ 山^{さん}上^{じやう}の 山^{やま}を 奈^{いか}んせん

之^{これ}を 仰^{あお}げば 一^{いっ}層^{そう} 高^{たか}し

通釈 山に登つて下界を眺めると天下も小さなものだと思われ、自ら意氣の豪なることを誇るのである。だが、しかし、いま登りつめた山の上にもまた山がある。これはどうしたらよいのであろうか。自分の登つた山はかなり高いと思うのだが、山上の山はさらにいっそう高く聳えている。人間もこれと同じで、自分よりいっそう上の人間がいる。決して慢心などすべきでない。